

小特集「パンデミックに思うこと」

—ある院生のぼんやりとした所感—
パンデミックの慢性化に備えて

吉川 弘 晃

はじめに

この「緊急事態」下、多くの人文学者が、その方法や効果は様々ではあるが、「歴史の教訓」を訴えようと懸命に動いている。「ミネルヴァの梟は迫り来る黄昏時によりやくその飛翔を始める」とはよく言ったものだが、単なる怠けた小鼻には俯瞰的な論評は難しい。身近な研究生活で感じたことを率直に語ることにした。このエッセイは、コロナ・ウイルスで生じている困難、それに対して実践可能な対策、今後近いうちに予想される障害の三点を、一人の院生の視点から扱うものである。

本論に入る前に、昨年度末（二〇二〇年三月）の個人的な思い出から始めたい。二月頃から強力な伝染病が武漢の街を阿鼻叫喚の地獄にしていることは耳にしていたが、それは endemic（域内的伝染）はおろか、epidemic（超域的伝染）を跳び越えて、pandemic（全域的伝染）へと変貌するほどの電光石火ぶりであった。その状況を身に染みて感じたのは、日文研の A A S ボストン大会への参加中止の報を聞いた三月九日であった。A A S (Association for Asian

Studies) は周知の通り、世界最大の伝統的な「アジア」地域研究の学会のひとつである。各分野での最高水準の学術報告、独創的・挑戦的なパネル、そして何より疾風怒濤の米語と丁寧な発止の討議……、「国際的な日本研究」を指す上でこうした波濤に採まれる経験は重要であると聞かされていたし、所属先から惜しみない参加支援を受けた。だが、コロナの猖獗が合州国での大会そのものを吹き飛ばすのは一瞬であった(三月一〇日)。

貴重な国際学会への参加機会の喪失は無念であったが(同様の理由で、三月初旬に予定されていたリトアニアでのポスター報告もキャンセルしていた)、同時に強く直感したのは、パンデミックが慢性化する短中期的な状況のなかで、人文学を続けるための対策を自分なりに考案せねばならないということであった。このエッセイを執筆している時点(二〇二〇年六月)の日本国内では「緊急事態宣言」が解かれ、「第一波」は過ぎ去ったとされているが、首都圏での感染者の数は予断を許さない状況にあるし、「第二波」で膨大な犠牲を蒙っている地域も少なくない。「日本研究」の世界に入ったばかりの私にとって既に幾つかの深刻な困難が生じている。なお、現時点での私の研究テーマは、二〇世紀前半の日本知識人によるソ連文物の導入とその影響である。手段については、同時代の広範な国際関係史の枠組で本テーマを捉えるため、日露両国の刊行資料や所蔵文書を中心に扱う一方、西欧諸国での先行研究や一次史料を補足的に用いることになる。

パンデミック発生期の問題

こうした私の立場を踏まえた上で、第一に、現時点で生じている人文学研究における困難をインプットとアウトプットの両面から一つずつ論じてみよう。

前者については、「図書館・文書館へのアクセス制限」を取り上げねばならない。今回のパ
ンデミック発生直後、国立国会図書館をはじめ、全国各地の公共図書館と文書館が、大幅な
サービス制限に踏み切った。無論、発送サービスなど様々な代替手段が講じられたし、現時点
では利用時間縮小を除けば、ほとんどの施設が問題なく利用できる。とはいえ、人文・社会科
学は原史料や関連文献への依拠なしに実証研究は不可能である以上、この数ヶ月は喪われたに
等しいと感じる研究者は少なからう。さらに、こうしたインプット面での混乱状態が長く
続く地域に閲覧すべき文献が所在する場合、研究課題の変更、少なくとも研究計画の修正が求
められよう。

アウトプット面では「成果報告の機会の減少」が挙げられる。成果報告の早期化・国際化・
増大化が強く奨励される昨今の人文学の潮流では、一年間にどれだけ業績を目に見える形で
公表できるかは、博士課程の（今や修士過程を含む）院生にとって二重の意味で「デッドライ
ン」である。一つには、国内外での学会報告や学術論文出版の数が、研究費・助成金獲得の成
否（つまり研究生活の「死活」問題に直結する）を決定するからであり、もう一つは、それが
決まった期間で博士論文を書き上げる（つまり「締切」を遵守する）ための証明書となるから
である。実際、私が学部・修士課程を過ごした二〇一〇年代には、多くの研究会やシンポジウ
ムで数多く報告していこうという競争的な雰囲気若手の間で共有されていたし、他ならぬ私
もまた、その潮流に便乗した。従って、そうした競争への数多の参入機会が今回のパンデミッ
クで物理的に断ち切られてしまったのは、業績主義のもとで生きざるを得ない大学院生たちに
とって精神的な動揺をもたらしているのは確かだ。

現時点で実践可能な対策

第二に、以上で示した困難に対して現時点で実践可能な対策を私の経験から紹介したい。まず、インプリント問題に対しては「オンラインでの文献閲覧」で部分的な解決を試みている。ロシア（場合によっては北米の）所蔵史料を用いる必要がある私にとって、この事態は極めて深刻だが、逆に言えば日本や西欧諸国の文献から捌いていくという、つまり取り組む研究課題の優先順位を変更するという迂回路が辛うじて開かれている。日本語文献については、国立国会図書館デジタルコレクションに頼っている。戦前の文献で著作権処理が済んだものはネット環境がある場所からアクセス及びダウンロード可能であるし、そうでないものも日文研図書館などからアクセス可能である。英独仏の各国語文献は、その多くは部分的にはあるが、Google Books から閲覧することが可能だし、史料・雑誌・研究書の一部をダウンロードできるサイトも多い。研究で出会った項目や人名を Wikipedia で検索し、各国語版ページの記述を比較して、そこで示された参考文献を Google Books など調査するという方法を使うと、意外な結びつきを発見することも少なくない。一九二七年、ソ連が各国の知識人を招待した「十月革命一〇周年記念祭」について書いた小論では、日本から参加した文学者・秋田雨雀が、ギリシャやドイツ、フランスなどの知識人と交わした交流について、各人の回想録や小説を分析することで明らかにしたが、その過程では Wikipedia と Google Books の併用が大いに役立った。

次にアウトプリント問題については「副専攻を作ること」で対策できる。学位取得の早期化が求められるなか、「一所懸命」こそが博士課程の美德であるのは日本に限った話ではなからう。それに対して私は学部以来、専門外の勉強にうつつを抜かし、数打ちゃ当たるとの感覚で諸言語に手を出し、研究テーマを二転三転させてきた。こうした「浮気性」は勧められるものではな

いし、そのツケは毎日のように支払われている。一方、図書館や文書館という手段を封じられる事態が生じた目下、研究の目的・手段を固く絞り過ぎることそれ自体がリスクと化したとは言えないだろうか。私自身は、あくまで博論執筆を第一義とすることを忘れないようにしつつも、そこから派生する研究も構想しているし、あるいは歴史学の思想・方法論についても別の研究テーマをもっている。こうしたサブテーマは、メインテーマと交差すれば博論に寄与するし、そうでなくとも（否、そうでないゆえに）博論が上手く進まない時の清涼剤としても機能する。突破口としてのサブテーマは日文研でもお馴染みの共同研究会から「外部注入」されることが多いが、内発的にサブテーマを生み出す上で、諸言語の習得や周辺分野の知識を常備しておくことが実際に効いている。

パンデミック慢性化後の課題

個人単位であれ社会単位であれ、病気というものは発生後より慢性化してからの方が遥かに厄介である。パンデミックが慢性化して「第n波」や「変異型」の流行と共存していかざるを得なくなった「アフター・コロナ」期には更なる困難が予想される。

これまで延々と論じてきた「傾向と対策」は全てインターネット環境を常時、ストレスなく利用できることを前提にしている。だがその前提そのものが部分的にはあれ崩れたらどうなるのだろうか。今後ますます進むであろう、業務のリモート化一つをとってみても、個人のIT環境やスキルの違いによる現場の混乱、ITインフラの突発的な破壊といった事態は容易に予想される。とすれば、検索（フロー）型に比べて時代遅れとされた、積ん読（ストック）型的知的実践がインプット面で見直されるのではないだろうか。ネット環境なしで研究を進め

られるだけの書齋と作業ルーチンの構築から出発せねばならない。

加えて私の周辺では、夕方から夜間に研究会をリモートで行っていると、自室の壁が薄いために隣室から苦情を受けたという事例が認められている。情報保護や感染防止の観点から喫茶店で行うのも難しいことを考えると、そもそもリモート会議を問題なく行える環境そのものが実は希少なのではないか。夜を徹して古典を会読したり、共同研究のネタを討議したりするのは、人文学徒の豊穡な思考にとって必要不可欠であるはずだ。^{iv} とすれば、そんな「当たり前」に高いコストを支払わなくてはならない将来、人文学 (scholarship) とは、読んで字のごとく、間暇 *oyoiji* (skhole) を十分にもつ限られた人々 (彼らが大学にいるとは限らない) のものにならなくては行かないか。これは下らぬ杞憂だと願いつつ、孤独に暇を耐える術を磨いていきたい。

(総合研究大学院大学・学生／日本学術振興会特別研究員 (DC1))

- i 若手の歴史研究者への支援の試みとして「歴史家ワークショップ」(東大・日本経済国際共同研究センター CIRIE を母体とする)がある。英語での研究発表会 Research Showcase を定期的に開催しており、二〇二〇年七月には日本史・日本文学編も実施。 <https://historiansworkshop.org/>
- ii 拙稿「秋田雨雀のソヴェエト経験(一九二七)―ウクライナ・カフカス旅行における西洋知識人と
の交流を中心に―」『人文学の正午』九号、一一二―八頁。
http://www.fragment-group.com/shogo/wp-content/themes/pdf/yoshikawa_article09.pdf
- iii その出発点は次の通り。拙稿「書評 遅塚忠躬『史学概論』(東京大学出版会、二〇一〇年)」『想文』
創刊号、九六―一〇三頁。
https://researchmap.jp/viator-634/misc/23686799/attachment_file.pdf
- iv 実際、私の秋田研究はギリシャ現代文学を専攻する福田耕佑氏との共同研究に依拠するところが多く、その成果はギリシャの日本学のための記事に反映された。

<https://www.greecejapan.com/japanesestudies/o-nikos-kazantzakis-kai-i-neoelliniki-logotexnia-ston-tomea-tis-iaponologias/>